



システムソフトウェア Version1.3.0 ~ 1.5.0 対応

トラフィックモニタ別冊マニュアル

Rev3.0

Blue Brick **EX**

イーサネットアクセスデバイス

NS-3510



エスアイアイ・ネットワーク・システムズ株式会社

はじめに

本別冊マニュアルではイーサネットアクセスデバイス NS-3510「BlueBrickEX」（以後、本装置と略記します）のトラフィックモニタ機能の操作に関する説明を記載しています。

本別冊マニュアルは Version 1.3.0 以降のシステムソフトウェアに対応しています。

本別冊マニュアルは、NS-3510 の「取扱説明書」、「コマンドリファレンス」、「設定事例集」および「NS-3510 別冊マニュアル Rev 3.0」と併用してご利用ください。これらのユーザマニュアルおよび別冊マニュアルの最新版は、下記の弊社ホームページからダウンロードすることができます。

弊社ホームページアドレス：

<http://www.sii.co.jp/ns>

ユーザマニュアルおよび本別冊マニュアルは、予告無く内容を更新させていただく場合がございますので、必要に応じて上記ホームページを参照してください。

本別冊マニュアルのリビジョン： Rev 3.0

目次

1.	トラフィックモニタ機能の概要.....	3
1.1.	トラフィックモニタを起動する前に	3
1.2.	トラフィックモニタの概略操作フロー	4
2.	トラフィックモニタの操作.....	5
2.1.	トラフィックモニタの起動とトップページ	5
2.2.	長期ログ機能の設定と操作	6
2.3.	長期ログファイル管理機能の設定と操作	12
2.4.	短期ログ機能の設定と操作	17
2.5.	EtherPort 情報の表示内容	19
2.6.	システム情報の表示内容.....	20
2.7.	トラフィックモニタ操作の終了	21

1. トラフィックモニタ機能の概要

1.1. トラフィックモニタを起動する前に

本装置のトラフィックモニタ機能では、操作端末として Web ブラウザが搭載された PC を使用します。操作端末と本装置はネットワークを経由して接続されていなければなりません。接続できるかどうか不明な場合には、ping コマンド等を利用して本装置と操作端末間の導通を確認してください。接続できることを確認後、下記の設定を行ってください。

(1) httpd オブジェクトの有効化

トラフィックモニタの操作は、本装置の httpd オブジェクトと操作端末のブラウザとの間で http プロトコル使用して行われます。このため本装置の httpd が有効になっていなければなりません。

httpd オブジェクトを有効にするためには”**enable httpd**”コマンドを使用します。

[設定例] `enable httpd`

このコマンドの詳細につきましては、「NS-3510 コマンドリファレンス (U00095533702)」の 3-235 ページを参照してください。

【注意】 本装置のデフォルト設定では httpd オブジェクトは無効となっています。

(2) 操作端末に対する http 通信の許可

本装置では、端末毎に利用できる通信プロトコルを制限する機能を具備しています。本装置が操作端末に対して http 通信を許可していない場合、操作端末のブラウザから本装置のトラフィックモニタに接続することができません。そこで”**create allowhost**”コマンドにより、操作端末との http 通信を許可します。下記の設定例では、IP アドレスが 192.168.10.11 の操作端末に対して http 通信を許可しています。

[設定例] `create allowhost 192.168.10.11 service httpd`

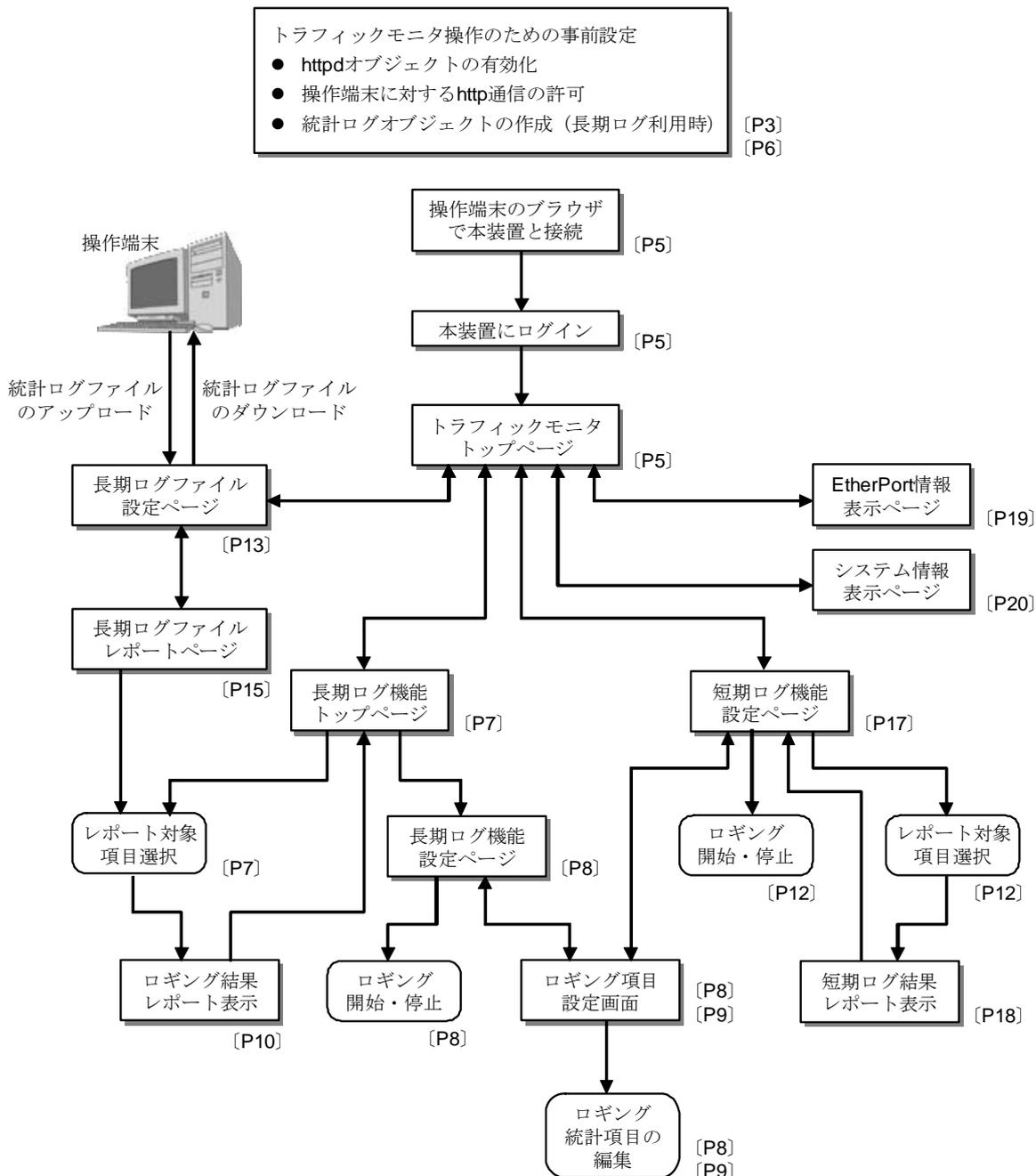
このコマンドの詳細につきましては、「NS-3510 コマンドリファレンス (U00095533702)」の 3-236 ページを参照してください。

【注意】 本装置のデフォルト設定では全ての接続端末に対して http 通信を禁止しています。

1.2. トラフィックモニタの概略操作フロー

トラフィックモニタ機能の操作フローの概略を図 1-2-1 に示します。
 図で各操作項目に付与されている [] 内の数字は、その項目の説明を記載している本別冊マニュアルのページを示しています。

図 1-2-1 トラフィックモニタの概略操作フロー



【注意】

- 実際には図中の記載よりも自由に各操作画面間の移動が可能ですが、判り易いようにフローを簡略化しています
- 管理者モードでなければ操作できない項目もあります。詳細は2章の説明を参照してください

2. トラフィックモニタの操作

2.1. トラフィックモニタの起動とトップページ

- ① 操作端末上でブラウザを起動し、ブラウザに本装置の IP アドレスを指定します。

図 2-1-1 トラフィックモニタとの接続(アドレス入力)



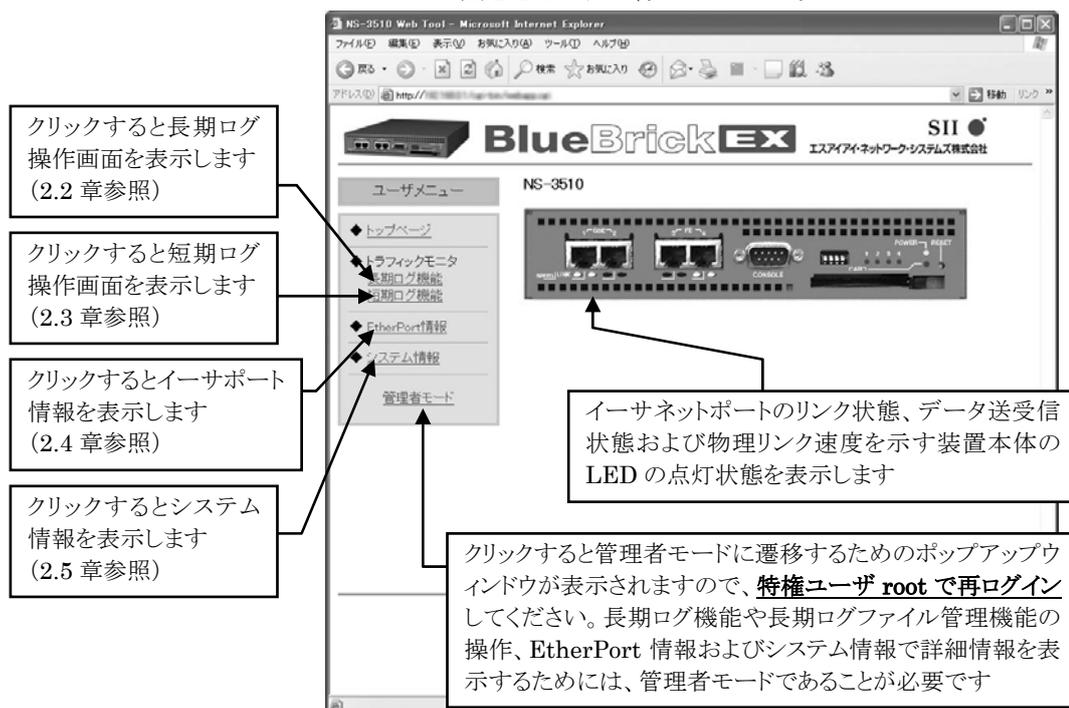
- ② 本装置と接続するためのユーザ名とパスワードの入力を要求するポップアップウィンドウが表示されますので、ユーザ名に"somebody"などの一般ユーザを指定し「OK」ボタンをクリックします。

図 2-1-2 トラフィックモニタとの接続(ユーザ認証)



- ③ ユーザ名とパスワードによる認証が正常終了すると、トラフィックモニタのトップページが表示されます。トップページでは本装置のイーサネットポートの状態を確認できる他、トラフィックモニタの各種機能を実行するメニューが表示されます。

図 2-1-3 トラフィックモニタのトップページ



2.2. 長期ログ機能の設定と操作

長期ログ機能は、本装置のイーサネットポートから入力されたフレーム数やストリームの実効出力帯域などを指定した一定の間隔で長期間にわたって記録（ロギング）する機能です。同じようにロギングを行う機能として短期ログ機能（2-3章）がありますが、ロギングの間隔や同時に取得できるロギング統計データ（ログデータ）の数などが異なります。長期ログ機能と短期ログ機能の差分を表 2-2-1 に示します。

表 2-2-1 長期ログ機能と短期ログ機能の差分

操作内容	長期ログ機能	短期ログ機能
ロギング継続期間	停止操作を行うまで継続します	最大 5 分
ロギングの間隔	5 分, 10 分, 15 分, 30 分, 1 時間, 12 時間から選択します	5 秒 (固定)
同時取得ログデータ数	最大 50	最大 2
設定ファイルへの保存	ログ機能の設定内容はスタートアップファイルに設定されます	ログ機能の設定内容はスタートアップファイルに設定されません
操作時の動作モード	管理者モードでなければ設定操作はできません。ロギング結果は一般ユーザモードでも閲覧可能です	管理者モードおよび一般ユーザモードのいずれの場合でも、設定操作とロギング結果の閲覧が可能です

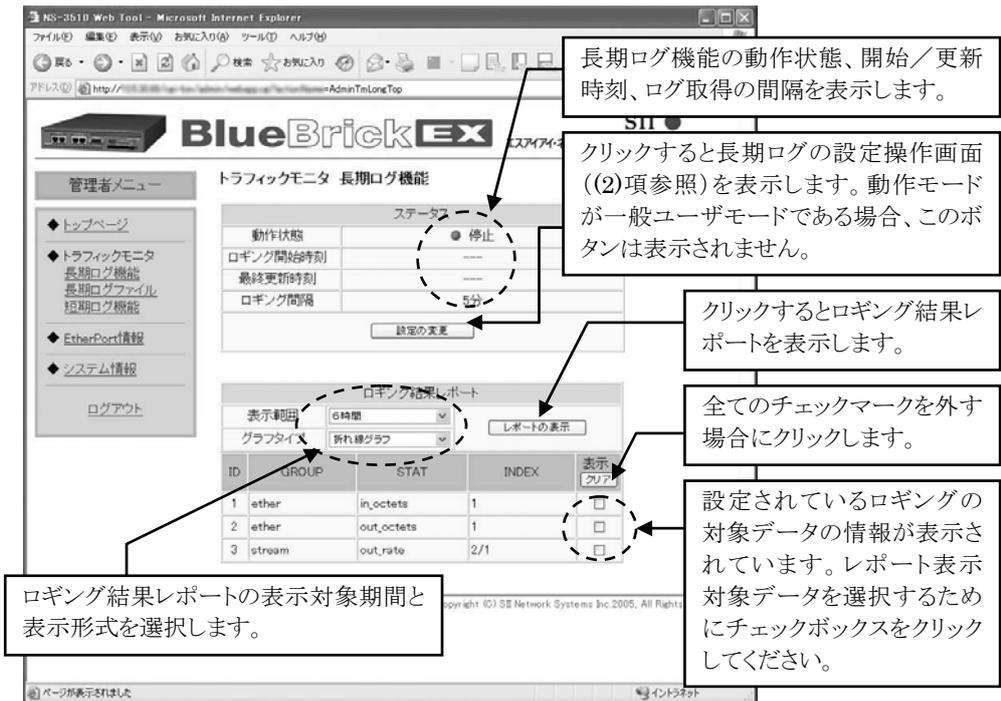
長期ログ機能を使用する場合には、以下の点に注意してください。

- ① 長期ログの設定操作に先立って統計ログオブジェクトが"**create statslog**"コマンドにより作成されていなければなりません。このコマンドにつきましては「NS-3510 コマンドリファレンス (U00095533702)」の 3-237 ページを参照してください
- ② 長期ログ機能において、ロギング結果レポートの表示操作以外の設定操作を行うためには動作モードが管理者モードでなければなりません。一般ユーザモードでトラフィックモニタ画面を開いている場合には、ユーザ/管理者メニューで「管理者モード」をクリックしてください。管理者モードに遷移するためのポップアップウィンドウが表示されますので、特権ユーザ **root** で再ログインしてください
- ③ ロギングの対象となるストリームなどのオブジェクトは長期ログ機能の設定を行う前に作成されていなければなりません。未作成のオブジェクトは、ロギング対象を選択するメニュー（ロギング統計項目編集画面の **INDEX** 項）に現れません
- ④ 長期ログ機能で同時にロギングできる統計項目の数は最大 50 です
- ⑤ ロギング結果レポートで同時に表示できる統計項目の数は最大 8 です
- ⑥ 長期ログ機能の設定はスタートアップファイルに設定されます。設定を保存したい場合には"**write**"コマンドを実行してください
- ⑦ トラフィックモニタではなくコマンドにより長期ログ機能の設定を行うことも可能です。コマンドの詳細につきましては「NS-3510 別冊マニュアル Rev 3.0」の 1.4 章および「NS-3510 コマンドリファレンス (U00095533702)」の 3-49 章を参照してください

(1) 長期ログ機能のトップページ

ユーザ/管理者メニューで「長期ログ機能」をクリックすると長期ログ機能のトップページが表示されます。このページでは長期ログ機能の動作状態を確認できます。また、ロギング結果レポートおよび長期ログ機能の設定ページに移行できます。

図 2-2-1 長期ログ機能のトップページ



ロギング結果を表示させる場合、ロギング統計項目と表示形式を選択します。ロギング統計項目を選択するためには、対応するチェックボックスをクリックしチェックマークを付与します。チェックマークを外す場合には、そのチェックボックスを再度クリックしてください。1度に全てのチェックマークを外す場合には「クリア」ボタンをクリックします。「表示範囲」ではレポートの表示対象期間を、「グラフタイプ」では表示形式を選択します。

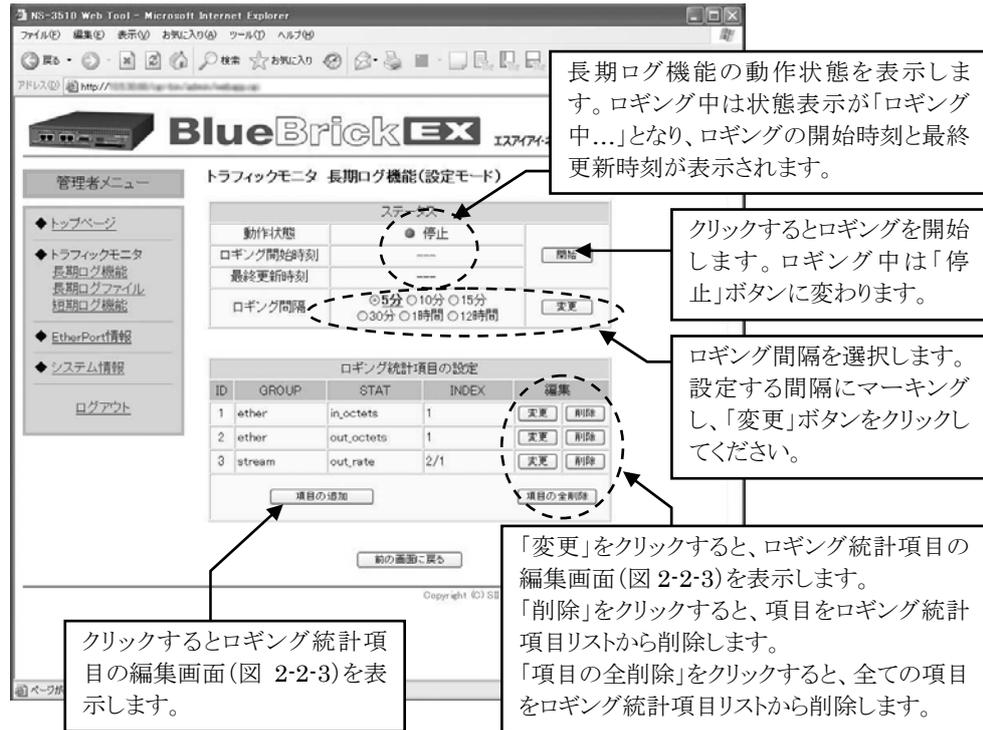
表 2-2-2 ログデータの表示範囲と表示形式

設定項目	選択できる設定	説明
表示範囲	6 時間, 12 時間, 1 日, 1 週間, 1 ヶ月	グラフまたは表形式で表示する際の、過去何時間あるいは何日間のロギング結果を表示するのかを指定します。
グラフタイプ	折れ線グラフ	ログデータを折れ線グラフで表示します
	積み上げグラフ	ログデータを積み上げ形式のグラフで表示します
	テキスト表示	ログデータの数値を表形式で表示します

(2) 長期ログ機能の設定操作

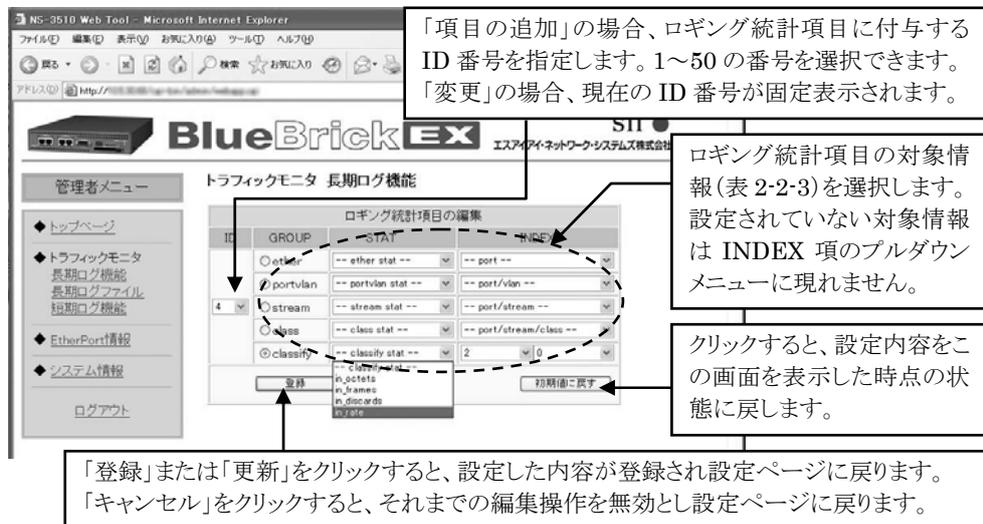
長期ログ機能のトップページで「設定の変更」ボタンをクリックすると長期ログ機能の設定ページが表示されます。このページではロギングの開始および停止、ロギング間隔の設定、ロギング統計項目の削除および統計項目の追加/変更ページの表示を行うことができます。

図 2-2-2 長期ログ機能の設定ページ



長期ログ機能の設定ページで「項目の追加」または「変更」をクリックすると、ロギング統計項目の編集画面が表示されます。

図 2-2-3 ロギング統計項目の編集画面



ロギング統計項目の編集画面で選択できるロギング対象情報を表 2-2-3 に示します。

表 2-2-3 選択できるロギング対象情報

GROUP	INDEX 項で指定した対象においてロギングできる情報	
ether	INDEX で指定するイーサネットポート	
	in_octets	受信オクテット数
	in_frames	受信フレーム数
	in_multicast	受信マルチキャストフレーム数
	in_broadcast	受信ブロードキャストフレーム数
	in_discards	受信時廃棄フレーム数
	in_errors	受信エラーフレーム数
	in_rate	平均受信レート
	out_octets	送信オクテット数
	out_frames	送信フレーム数
	out_multicast	送信マルチキャストフレーム数
	out_broadcast	送信ブロードキャストフレーム数
	out_discards	送信時廃棄フレーム数
	out_rate	平均送信レート
portvlan	INDEX で指定するイーサネットポートと VLAN の組み合わせ	
	in_octets	受信オクテット数
	in_frames	受信フレーム数
	in_discards	受信時廃棄フレーム数
	in_rate	平均受信レート
	out_octets	送信オクテット数
	out_frames	送信フレーム数
	out_rate	平均送信レート
stream	INDEX で指定するイーサネットポートとストリームの組み合わせ	
	out_octets	送信オクテット数
	out_frames	送信フレーム数
	out_discards	送信時廃棄フレーム数
	out_rate	平均送信レート
class	INDEX で指定するイーサネットポート、ストリームそしてクラスの組み合わせ	
	out_octets	送信オクテット数
	out_frames	送信フレーム数
	out_discards	送信時廃棄フレーム数
	out_rate	平均送信レート
	out_frames (green)	green にマーキングされたフレームの送信フレーム数
	out_frames (yellow)	yellow にマーキングされたフレームの送信フレーム数
	out_frames (red)	red にマーキングされたフレームの送信フレーム数
	out_discards (green)	green にマーキングされたフレームの廃棄フレーム数
	out_discards (yellow)	yellow にマーキングされたフレームの廃棄フレーム数
out_discards (red)	red にマーキングされたフレームの廃棄フレーム数	
classify	INDEX で指定するイーサネットポートとクラスの組み合わせ	
	in_octets	受信オクテット数
	in_frames	受信フレーム数
	in_discards	受信時廃棄フレーム数
	in_rate	平均受信レート

(3) ログ結果レポート画面の操作

長期ログ機能のトップページで、レポート表示させるログ統計項目、表示範囲およびグラフタイプを選択し「レポートの表示」をクリックすると、ログ結果が指定した形式で表示されます。図 2-2-4 に積み上げグラフ形式での統計レポート表示例を示します。ログが動作中の場合でも、その時点までのログ結果に基づいてレポート表示可能です。さらにオートリフレッシュ機能により結果表示を自動更新させることができます。オートリフレッシュの間隔は 5 分、10 分、30 分、60 分のいずれかを指定します。

図 2-2-4 ログ結果レポート(長期ログ機能)

図 2-2-4 は、NS-3510 Web Tool の「長期ログ機能」画面のスクリーンショットを示しています。画面には、ログ結果の積み上げグラフが表示されています。グラフの縦軸は速度（kbps）を示し、横軸は時間（2019/10/19 18:41 から 19:02）を示しています。グラフには、stream out_rate 2/1 (kbps) から 2/23 (kbps) までの複数の項目が色分けされて表示されています。

画面下部には、「オートリフレッシュ間隔」のプルダウンメニューがあり、5分、10分、30分、60分が選択可能です。また、「オートリフレッシュを開始する」ボタンも表示されています。

図中の注釈:

- 「グラフはログ統計項目別に色分けされて表示されます。」
- 「オートリフレッシュ間隔を選択し「オートリフレッシュを開始する」をクリックすると、指定した間隔でグラフ表示を自動更新します。オートリフレッシュ間隔として 5 分、10 分、30 分、60 分が選択可能です。」

(4) ログ間隔とレポート表示上のデータ間隔の関係

長期ログ機能では停止操作を行うまでロギングを継続しますが、本装置に保持できるデータ容量には限りがあるため、一定の期間を経過したログデータは失われます。この期間はロギング間隔の設定に依存して決まります。本装置では設定されたロギング間隔でログデータを蓄積するデータベースの他に、より長い間隔でログデータを蓄積するデータベースを併用することで、最長で過去1ヶ月間に亘るロギングの結果レポートをサポートしています。ロギング結果レポートで表示範囲を1週間または1ヶ月に設定した場合、レポート上のログデータ間隔は実際の設定よりも長い間隔になる場合があります。

ロギング間隔の設定、ロギング結果レポートの表示範囲およびレポート上のログデータ間隔の関係を図2-2-4に示します。

表 2-2-4 ログ間隔とロギング結果レポート上のデータ間隔との関係

ロギング 間隔設定	ロギング結果レポートの表示範囲設定				
	6時間	12時間	1日	1週間	1ヶ月
5分	5分間隔	5分間隔	5分間隔	30分間隔	2時間間隔
10分	10分間隔	10分間隔	10分間隔	30分間隔	2時間間隔
15分	15分間隔	15分間隔	15分間隔	30分間隔	2時間間隔
30分	30分間隔	30分間隔	30分間隔	30分間隔	2時間間隔
1時間	1時間間隔	1時間間隔	1時間間隔	1時間間隔	2時間間隔
12時間	-	12時間間隔	12時間間隔	12時間間隔	12時間間隔

2.3. 長期ログファイル管理機能の設定と操作

注意 : Version 1.3.1 以前のシステムソフトウェアは本機能をサポートしていません。

長期ログファイル管理機能は、長期ログ機能により取得したログデータを統計ログファイル（CSV 形式）としてセットアップカードに保存すると共に、保存した統計ログファイルを管理するための機能を提供しています。操作画面上で統計ログファイルの保存、読み込み、削除および表示が実行できる他、本装置とネットワーク接続している PC 端末との間で統計ログファイルのアップロードおよびダウンロードが可能です。

長期ログファイル管理機能を使用する場合には、以下の点に注意してください。

- ① 長期ログファイル管理機能を使用するためには動作モードが管理者モードでなければなりません。ユーザモードの操作メニューには、長期ログファイル管理機能の操作画面に遷移するためのメニュー「長期ログファイル」が現れません
- ② 統計ログファイルはセットアップカードに保存されます。そのため長期ログファイル管理機能の操作を開始する前に、本装置の CF カードスロットにセットアップカードを差し込んでください。セットアップカードが差し込まれていないとエラーとなり、操作を実行できません
- ③ これまでセットアップカードを本体に差し込まない状態で本装置を使用している場合、本装置が起動する際に読み込む内蔵フラッシュメモリ内のスタートアップファイル（設定情報が保存されたファイル）を、予めセットアップカード側のスタートアップファイルにコピーしてから、長期ログファイル管理機能をご利用ください。本装置は起動時にセットアップカードが差し込まれていると、セットアップカード側のスタートアップファイルを読み込みます。そのためセットアップカードに正しい設定情報が記録されたスタートアップファイルが保存されていない場合、計画外停電などで予期せぬ再起動が発生すると、本装置は正しい状態で起動できません。スタートアップファイルのコピー方法につきましては、「NS-3510 コマンドリファレンス (U00095533702)」の 5-2 章を参照してください
- ④ トラフィックモニタではなく、統計ログファイルの保存やファイル転送などをコマンドにより実行することも可能です。コマンドの詳細につきましては「NS-3510 別冊マニュアル Rev 3.0」を参照してください

(1) 長期ログファイル管理機能の設定ページ

管理者メニューで「長期ログファイル」をクリックすると長期ログファイル管理機能の設定ページが表示されます。このページでは統計ログファイルの保存、操作端末から本装置への統計ログファイルのアップロード、本装置から操作端末への統計ログファイルのダウンロードが可能です。

保存されている統計ログファイルはログファイル一覧に表示されます。ファイル名をクリックすると、その統計ログファイルのレポート画面に移行します。

図 2-3-1 長期ログファイル管理機能の設定ページ

「生成する」をクリックすると、現在の長期ログデータを統計ログファイルとしてセットアップカードに保存します。そのファイルはログファイル一覧に現れます。「保存単位」として1日、1週間、1ヶ月を選択できます。

「参照」をクリックすると、操作端末内に保存されている統計ログファイルを選択するためのボックスが表示されます。ボックス内でファイルを選択し、「アップロード」をクリックすると、そのファイルがセットアップカードに保存されます。

「全削除する」をクリックすると、セットアップカード内の全て統計のログファイルが削除されます。

ログファイル一覧で表示されているファイル名をクリックすると、選択した統計ログファイルレポートページ(図 2-3-3)が表示されます。「ダウンロード」をクリックすると、ログファイルを操作端末内に保存する操作に移行します。「削除」をクリックすると、対応するログファイルがセットアップカードから削除されます。

ログファイル一覧 (総ファイル数 3 : 総容量 272KB)			
ファイル名	サイズ	操作	
NS-3510_20070319_094847.csv	9597	ダウンロード	削除
NS-3510_20070309_150004.csv	9649	ダウンロード	削除
NS-3510_20070308_150004.csv	8819	ダウンロード	削除

● ログファイルの生成

ログファイルの操作メニューで「生成する」をクリックすると、本装置が保持している現在の長期ロギングの取得データを統計ログファイルとしてセットアップカードに保存します。長期ロギング実行中でも、その時点までのロギングデータをログファイルとして保存します。

生成される統計ログファイルの名前は"NS-3510_YYYYMMDD_HHMMSS.csv"の形式となります。ここで「YYYYMMDD_HHMMSS」は統計ログファイルが生成された年月日および時分秒を表し、例えば2007年3月3日の15時10分5秒に生成された統計ログファイルのファイル名は"NS-3510_20070303_151005.csv"となります。

ログファイル生成メニューでは、現在から過去にさかのぼって保存する統計ログに保存単位を設定します。例えば、最低 1 週間分の統計ログを保存したい場合には、「1 週間」を選択します。なお、保存単位の設定に応じて、保存されるログ情報のタイムスタンプの間隔が自動的に調整されます。

保存単位のデフォルトは「1 日」です。

- ログファイルのアップロード

操作端末内に保存されている統計ログファイルを、本装置のセットアップカード内にアップロードする機能です。

「参照」をクリックすると、図 2-3-2 に示すアップロードするファイルを指定するための「ファイルの選択」ボックスが表示されます。

図 2-3-2 アップロード時の「ファイル選択」ボックス表示例



「ファイルの選択」ボックスでファイルを選択すると、同時にボックスは消去され、「参照」ボタン左側のアップロードファイル指定欄に選択したファイルが表示されます。ここで「アップロード」をクリックすると、統計ログファイルのアップロードが実行されます。アップロード終了後、ログファイル一覧に当該ログファイルのファイル名が現れます。

- ログファイルの全削除

セットアップカードに保存されている全ての統計ログファイルを削除します。

「全削除する」をクリックすると、削除の実行を確認するダイアログボックスが表示されますので、そのまま削除処理を継続する場合には「OK」をクリックしてください。

特定の統計ログファイルのみを削除する場合、ログファイル一覧にある「削除」ボタンをクリックします。

● ログファイル一覧メニューでの操作

ログファイル一覧メニューでは、セットアップカードに保存されている統計ログファイルの一覧表示と、それぞれの統計ログファイルに対して、削除および操作端末へのダウンロード機能を提供しています。

「削除」をクリックすると、対応する統計ログファイルだけがセットアップカードから削除されます。

「ダウンロード」をクリックすると、「ファイルのダウンロード」ダイアログボックスが表示されますので、「保存」をクリックしてください。「名前を付けて保存」ダイアログボックスが表示されます。ここでログファイルのダウンロード先のフォルダを選択し、「保存」をクリックするとダウンロードが開始されます。

ログファイル一覧に表示されているファイル名をクリックすると、統計ログファイルレポートページに移行します。

(2) 統計ログファイルレポートページ

長期ログファイル管理機能の設定ページで、ログファイル一覧内のファイル名をクリックすると、統計ログファイルレポート画面が表示されます。

図 2-3-3 統計ログファイルレポート画面



- ログファイルの情報とロギングステータス

統計ログファイルレポートページで表示される統計ログファイルに関する各種の情報を表 2-3-1 に示します。

表 2-3-1 統計ログファイル情報ページで表示される情報

情報の種類	情報の内容	解 説
ログファイルの情報	ファイル名	統計ログファイルのファイル名
	生成日時	統計ログファイルの生成時刻 アップロードされた統計ログファイルは、 アップロード時刻が生成日時になります
	ファイルサイズ	統計ログファイルの容量 (バイト)
	ファイル形式	統計ログファイルのファイル形式
ロギングステータス	ロギング開始時刻	統計ログデータのロギング開始時刻
	最終更新間隔	統計ログデータのロギング最終更新時刻
	ロギング間隔	統計ログデータのロギング間隔
	保存単位	統計ログデータの保存単位 統計ログファイル生成時に選択します

- ロギング結果レポート

統計ログファイルに記録されているロギングデータを表示するロギング結果レポート画面の表示形式を設定します。

本機能の設定操作は、長期ログ機能におけるロギング結果レポート表示手順と同等です。(2-2 章を参照してください)

- ログファイルの生成とスケジューラ機能の連携

スケジューラ機能

- ログファイルの送信とスケジューラ機能の連携

2.4. 短期ログ機能の設定と操作

短期ログ機能は、長期ログ機能と同様に統計ログを取得する機能ですが、5秒間隔でロギングを実行できるため、より細かい精度でトラフィックの時系列的な変動を確認することが可能です。ただし、同時にロギングできる統計項目の数は最大2です。

短期ログ機能と長期ログ機能の差分につきましては2.2章の表2-2-1を参照してください。

短期ログ機能を使用する場合には、以下の点に注意してください。

- ① 短期ログ機能の設定はスタートアップファイルに保存されません。そのため本装置の再起動により設定内容は失われます
- ② トラフィックモニタではなくコマンドにより短期ログ機能の設定を行うことも可能です。コマンドの詳細につきましては「NS-3510 別冊マニュアル Rev 3.0」の1.4章を参照してください
- ③ 短期ログでは、ロギング中に統計項目の追加および変更を行うことはできません

(3) 短期ログ機能の設定ページ

ユーザ/管理者メニューで「短期ログ機能」をクリックすると短期ログ機能の設定ページが表示されます。このページでは短期ログ機能の動作状態を確認できます。また、ロギング結果レポート画面に移行できます。

図 2-4-1 短期ログ機能の設定ページ

短期ログ機能の動作状態、開始/更新時刻、ログ取得の間隔を表示します。

クリックするとロギングを開始します。ロギング中は「ロギングの停止」ボタンに変わります。ロギング統計項目が未設定の場合、クリックできません。

「追加」（登録済の統計項目の場合には「変更」）をクリックすると、ロギング統計項目の編集画面（図 2-2-3）を表示します。「削除」をクリックすると、その項目をロギング統計項目リストから削除します。

クリックするとロギング結果レポート（図 2-4-2）を表示します。1度もロギングが実行されていない場合、クリックできません。

ID	GROUP	STAT	INDEX	編集
1	---	---	---	追加 削除
2	---	---	---	追加 削除

短期ログ機能の設定ページのロギング統計項目の設定で「追加」または「変更」をクリックすると、ロギング統計項目の編集画面が表示されます。編集画面の操作は長期ログ機能の当該操作と同様です。詳細は 2-2 章(2)項を参照してください。

(4) ロギング結果レポート画面の操作

短期ログ機能の設定ページで「レポートの表示」をクリックすると、ロギング結果レポートが表示 (図 2-4-2) されます。短期ログ機能では折れ線グラフ形式で表示を行います。また、オートリフレッシュ機能により結果表示を自動更新させることができます。オートリフレッシュの間隔は 10 秒、30 秒、1 分のいずれかを指定します。

図 2-4-2 ロギング結果レポート(短期ログ機能)

折れ線グラフはロギング統計項目別に色分けされて表示されます。

オートリフレッシュ間隔を選択し「オートリフレッシュを開始する」をクリックすると、指定した間隔でグラフ表示を自動更新します。オートリフレッシュ間隔として 10 秒、30 秒、1 分が選択可能です。

2.5. EtherPort 情報の表示内容

ユーザ/管理者メニューの「EtherPort 情報」をクリックすると、イーサネットポートの状態および関連する統計情報が表示されます。

図 2-5-1 EtherPort 情報の表示ページ



このページで表示される情報を表 2-451 に示します。一般ユーザモードで表示される情報は管理者モードで表示される情報のサブセットになっています。

表 2-5-1 EtherPort 情報ページで表示する情報

表示項目	項目の説明	一般ユーザモード	管理者モード
Link	リンク状態 (UP または DOWN)	○	○
Speed	リンク速度 (100M または 10M)	○	○
Duplex	全二重 (full) または半二重 (half)	○	○
Receive information			
Octets	受信オクテット数	○	○
Frames	受信フレーム数	○	○
Multicast	受信マルチキャストフレーム数	○	○
Broadcast	受信ブロードキャストフレーム数	○	○
Discards	受信時廃棄フレーム数	×	○
Fragment	受信フラグメントフレーム数	×	○
Align Err	受信アラインメントエラーフレーム数	×	○
Length Err	受信レンジスエラーフレーム数	×	○
FCS Err	受信 FCS エラーフレーム数	×	○
Oversize	受信オーバーサイズエラーフレーム数	×	○
Undersize	受信アンダーサイズエラーフレーム数	×	○
Transmit information			
Octets	送信オクテット数	○	○
Frames	送信フレーム数	○	○
Multicast	送信マルチキャストフレーム数	○	○
Broadcast	送信ブロードキャストフレーム数	○	○
Discards	送信時廃棄フレーム数	×	○
Error	送信時エラーフレーム数	×	○

2.6. システム情報の表示内容

ユーザ/管理者メニューの「システム情報」をクリックすると、表 2-6-1 に示す本装置のシステム情報が表示されます。一般ユーザモードで表示される情報は管理者モードで表示される情報のサブセットになっています。

表 2-6-1 システム情報ページで表示する情報

表示項目	項目の説明	一般ユーザ モード	管理者 モード
バージョン情報			
1st Boot	ファーストブートプログラムのバージョン	×	○
2nd Boot	セカンドブートプログラムのバージョン	×	○
Boot Status	前回起動した時の起動方法	○	○
System Up Time	前回起動日時	×	○
Local MAC Address	本装置の MAC アドレス	○	○
Number of MAC Address	本装置が持つ MAC アドレス数	○	○
Serial No.	本装置の製造シリアル番号	○	○
Main Board CPU	メイン基板に搭載された CPU 種別	○	○
Main Memory	本装置のメモリ容量	○	○
Board Package Rev	基板パッケージのリビジョン	×	○
Board PCB Rev	メイン基板のリビジョン	×	○
Ex.Board Information	拡張基板のリビジョン	×	○
Board Options	基板のオプション	×	○
Boot System	起動したシステムの種別	○	○
Boot Config	起動時に読み込んだ装置設定情報	×	○
System Software Version	システムソフトウェアバージョン	○	○
メモリ情報			
Total Memory	システムが使用する全メモリ容量	×	○
Used Memory	使用中のメモリ容量	×	○
Free Memory	未使用のメモリ容量	×	○

2.7. トラフィックモニタ操作の終了

操作端末でブラウザを閉じることにより、操作端末と本装置間の **http** 通信が切断されトラフィックモニタの操作が終了します。

ロギング実行中に上述の終了処理あるいは何らかの事由により **http** 通信の切断が発生した場合でも、本装置はロギング処理を継続しますので、操作端末から本装置のトラフィックモニタに再ログインすることにより、ロギング結果および動作状況を確認することができます。本装置内に保存された統計ログデータは、本装置の再起動もしくは新たなロギングが開始されない限り保持されます。